



(原寸)

× 〔申力〕	× 〔丑成力〕	× 〔亥皮〕	× 〔戌成丸〕	× 〔丁酉定〕	× 〔平〕
天間日血忌	人出宅大小	往亡天倉重	望天倉小	天李乃井	□

裏面 持統天皇三年四月]

最古のカレンダー - 2002年石神遺跡出土具注曆木簡 -

具注曆とは、律令政府によって毎年作られた正式の曆で、「注」を「具」えた曆であったためこのように呼ばれます。曆は陰陽寮(占いや天文を司る役所)で作成され、書写されたものが中央や地方の役所に頒布されました。

この具注曆木簡は中心に穴を穿った円形状ですが、現在の形状は廃棄後に二次利用された際の加工によるもので、本来は長方形の板材でした。表記内容は表裏両面とも上下二段で構成され、上段には日を表す干支(「甲・乙・丙...」の十干と「子・丑・寅...」の十二支を組み合わせる方法)下段には一日ごとの吉凶を表す曆注が記されています。日の干支と曆注との組み合わせには規則がありますので、書かれている日付が特定できます。復元作業の結果、表面は持統天皇三年(689)三月八日から十四日まで、裏面は同年四月十三日から十九日までに相当する曆であることが分かりました。今までに見つかっていた最古の具注曆は神龜六年(729)のものでしたから、この木簡は現在のところ日本で最古の曆ということになります。

現在、東大寺正倉院に奈良時代の具注曆の実物が数点伝わっているほか、平城京跡や地方の役所跡などからも紙に書かれた具注曆が出土しています。しかし、紙の具注曆は長大な巻物の形です。巻物のままでは実用に不便ですから、一年分の曆のうち、当面必要な部分を何か別の素材に写しとり、同時に多数の役人が曆を見られるようにした壁掛けカレンダーのような物が作成されていたと考えられます。この具注曆木簡も、そのような目的で作成されたのでしょう。

律令制度とは、文書による行政の仕組みです。文書には必ず日付を記すので、役人達は今日が何日なのかを知らなくては仕事になりませんでした。時間の概念に縛られた生活が、この頃から既に始まっていたのです。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部 竹内 亮)



(庚力)(執)
× 申丸
(岡力)
× 辛酉破 上玄 虚厭
(破)
× 壬戌皮 三月節急盈九 ×
(危)(重力)
× 癸亥色 馬牛出棕
(甲力)
× 子成 絶紀帰忌
(乙力)
× 丑収 天間日
(開力)(血力)
× 忌

表面 持統天皇三年三月]

(原寸)

表面 持統天皇三年三月]

三月大	
一日癸丑開	九坎天倉
二日甲寅閉	帰忌
三日乙卯建	厭対天李
四日丙辰除	
五日丁巳満	重
六日戊午平	
七日己未定	血忌
八日庚申執	
九日辛酉破	上玄岡虚厭
十日壬戌破	三月節急盈九坎
十一日癸亥危	重馬牛出棕
十二日甲子成	絶紀帰忌 □天倉
十三日乙丑収	天間日
十四日丙寅開	血忌 厭対
十五日丁卯閉	
十六日戊辰建	
十七日己巳除	重
十八日庚午満	天李
十九日辛未平	
廿日壬申定	厭
廿一日癸酉執	
廿二日甲戌破	九坎
廿三日乙亥危	重
廿四日丙子成	帰忌天倉
廿五日丁丑収	三月中
廿六日戊寅開	血忌厭対
廿七日己卯閉	
廿八日庚辰建	
廿九日辛巳除	重
卅日壬午満	往亡天李

(黒の部分が表記内容)

卅日壬午満	忌
廿九日辛巳除	天倉 重
廿八日庚辰建	天倉
廿七日己卯閉	天倉
廿六日戊寅開	血忌
廿五日丁丑収	中九坎 厭
廿四日丙子成	重
廿三日乙亥危	
廿二日甲戌破	
廿一日癸酉執	
廿日壬申定	
十九日辛未平	
十八日庚午満	
十七日己巳除	
十六日戊辰建	
十五日丁卯閉	
十四日丙寅開	
十三日乙丑収	
十二日甲子成	
十一日癸亥危	
十日壬戌破	
九日辛酉破	
八日庚申執	
七日己卯閉	
六日戊午平	
五日丁巳満	
四日丙辰建	
三日乙卯閉	
二日甲寅開	
一日癸丑開	